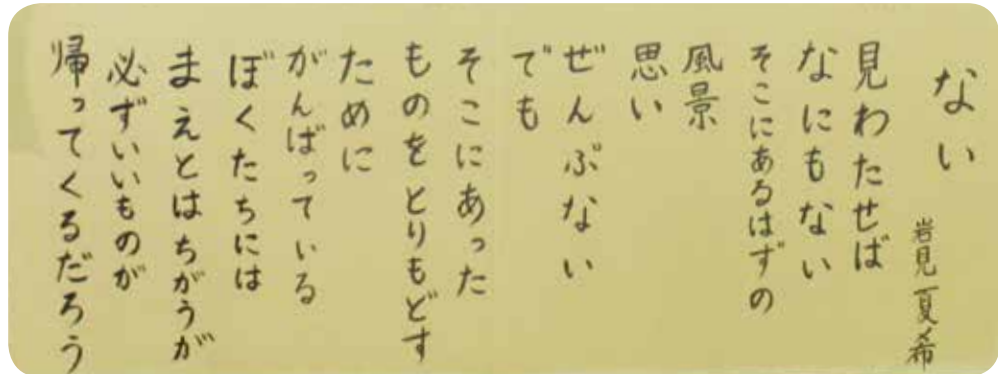


希望の詩 ~「ない」~

1 段ボールに書かれた詩



町役場に掲示された詩



この詩を書いた仙台市に住む岩見夏希さんは、震災当時小学5年生でした。祖父母の住む山元町には、小さい頃から何度も訪れていました。そこには、大好きな風景が広がり、大好きな人々がいました。

しかし、震災から2週間後に祖父母の家を訪れて、久しぶりに見た町は、何もかもが変わっていました。自然豊かなあの景色、人々の笑顔…昔から知っている、今まで当たり前にあった全てのものが、なくなっていたのです。

詩を書いたり読んだりすることが好きだった岩見さんは、その時の思いを詩にすることにしました。祖父母宅にあった、支援物資の入っていた段ボールに筆ペンで書き上げました。詩は、たくさんの方が訪れていた町役場に掲示され、震災で悲しみにくれていた大勢の人たちを励ましました。

2 「りんごかわいや音楽会」～希望の詩発表会～

山元町には、震災からわずか3か月で開局したFM「りんごラジオ」があります。この「りんごラジオ」が岩見さんの「ない」の詩について放送したことがきっかけで、この詩にメロディがつけました。そして、希望の詩として2012（平成24）年1月に山元町で開かれた「りんごかわいや音楽会」で地元の小学生たちや音楽家によって発表されました。

音楽会終了後には、「ない」の歌をまた聞きたいというアンコールの声がたくさんあったそうです。

岩見夏希さんの話

震災を経験し、自分がどれだけ恵まれた環境にいるかを知りました。わたしはその後、今、目の前にいる人、目の前にあるものを、前よりも、もっと大切にするようにしています。また、地域の方や周りの人に対して感謝する気持ちを忘れないうようにしています。

そして、震災を経験した一人の人間として、そのときに感じたこと、見たことをずっと忘れないでいたいと強く思っています。



? 考えよう

- 夏希さんは、震災後の町の被害の様子を見た直後に、支援物資の入っていた段ボールに詩を書きました。夏希さんはこのとき、どんな思いで詩を書いたのでしょうか。
- この詩は、読んだ人が他の人に伝え、またラジオやテレビで放送されるなど広く紹介されています。この詩のどんなところが、読んだ人の心を動かすのでしょうか。